地域研究　第28巻　第1号　1987—6

長野市における中心商店街の景観

内　山　幸　久*

I　は　じ　め　に

本研究の目的は，長野市の市街地を中心とする発展過程を考察し，さらに長野市の中心商店街である善光寺から長野駅までの中央通りと権堂通りの景観上の特色を考察することにある．ところで長野市に関する研究をみると，地理学的分野では市川健夫の研究[1]や小林寛義の研究[2]などがある．歴史学的分野では小林計一郎の研究[3]などがあり，資料的価値のあるものとして小林計一郎他5名の編集による写真集[4]がある．本研究ではこれらの研究をふまえた上で，前述の目的を達成しようとするものである．

第1図　長野市の中心部

資料：この図は国土地理院昭和60年発行の5万分の1地形図「長野」の一部である．

調査に当たっては，長野市の中心商店街に関する各種文献や資料を収集するとともに，1985年8月に中心商店街の景観写真の撮影を行なっている．また1986年8月には中心商店街の1階部分における商店の業種，商店の建物の構造，および商店の入っている建物の階数などの調査を行なっている．

長野市は長野盆地の中央部に位置する．長野市の中心部は第1図に示した．市街地の中心部は，裾花川やその北東にある小河川の湯福川による扇状地上から盆地床にかけて存在する．長野市の人口は市の資料によれば[5]，1985年に338,170人となっている．また，商業統計調査結果[6]によれば，1985年に長野市では5,491の商店が存在し，そのうちの75.8％に当たる4,160店が小売店である．そして小売店の年間商品販売総額は3,285億円余りに達している．小売店は市内各地に分布し，また商店街を形成しているが，なかでも中心をなしている商店街が善光寺から長野駅前広場まで，北から南へのびる中央通りの商店街と，中央通りの中北部から東へのびる権堂通りの商店街である．

II　長野市の発展　——市街地を中心に——

ここでは明治期以降における長野市の発展について，市街地の発展を中心に考察してみよう．

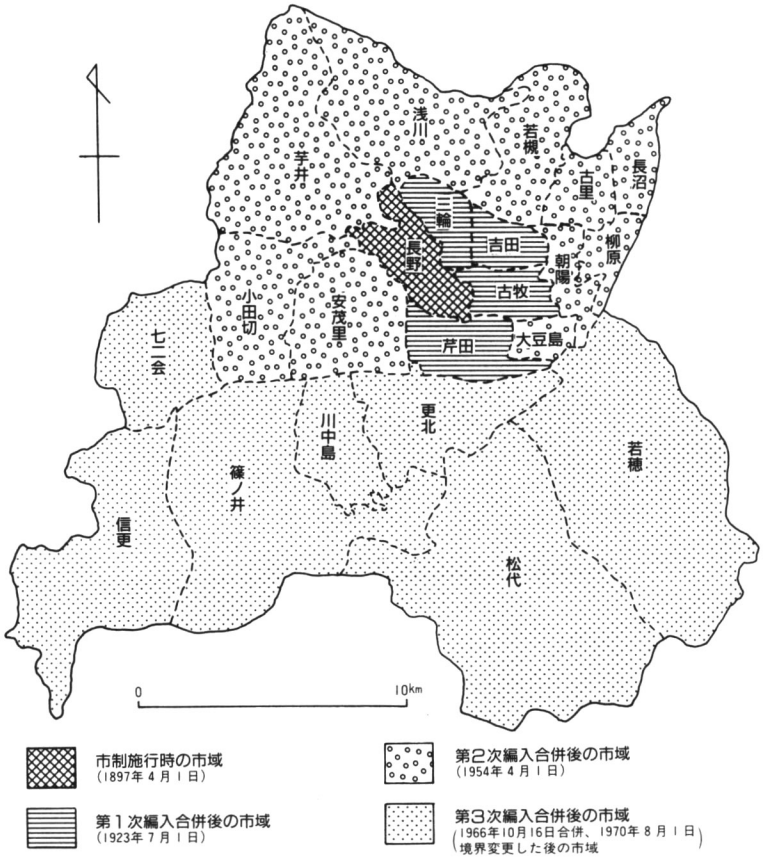
近世までの長野村は善光寺領であり，同村は善光寺の門前町として発展してきた．明治期になり，長野村は1871年（明治4）2月に中野県の管轄となった．同年6月に中野県庁が長野村に移され，中野県は長野県と改称されるに至った．また同年11月には

* 立正大学文学部

松代県・上田県などの北信・東信に成立していた諸県が長野県に統合された．さらに1874年（明治7）に長野村は長野町となった．1876年（明治9）5月に長野町は箱清水村と合併した。また同年8月には長野県と筑摩県とが合併し，長野町は新生長野県の県庁所在地となった．

県庁所在地となったことにより，長野町には県庁舎はもちろんのこと，裁判所・測候所などの官公署が相次いで設置された．また信濃教育会・師範学校・新聞社など県下の教育・文化の中心的機関が設置され，さらに銀行などの金融機関の本店・支店が開店した．また信越本線長野駅～直江津駅間が1886年（明治21）5月に開通し，同年12月には長野駅～軽井沢駅間が開通した．長野駅は当時の市街地南部に設置されたため，これ以降長野市の中心商店街は，善光寺の門前町と長野駅を結ぶ中央通りを中心に形成されてきた．一方，工業をみると，長野盆地の他の都市や県内の他の都市で発達した製糸業は長野町では発達せず，印刷業や食品工業がわずかに発達したにすぎない．それで長野町は明治期以降，門前町ということの他に，長野県の政治・経済・教育の中心地として発展してきたのである．

1889年（明治22）4月に町村制施行により，長野町・鶴賀町（旧権堂村と旧問御所村）・西長野町（旧腰村）・南長野町（旧妻科村）・茂管村が合併して新たに長野町が発足した．当時の長野町の人口は24,529人，戸数は5,596戸であり，面積は9.05 km²であった．さらに1897年（明治30）4月に長野町は市制を施行し，長野市となった．この時の長野市の人口は29,285人，戸数5,523戸であった．さらに長野市は1923年（大正7）7月に隣接する吉田町・芹田村・古牧村・三輪村を編入合併し（第1次合併）（第2図），面積が31.06 km²，人口が61,338人，戸数が12,305戸となった．なお第3図には1920年以降の長野市の人口推移を示したが，1987年の市域での人口をみると，これは1920



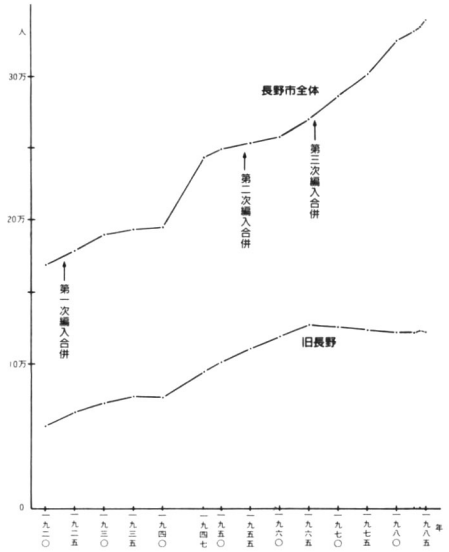
第2図　長野市域の拡大

資料：長野市企画調整部企画課（1986）：『長野市統計書　昭和60年版』長野市　p. 383，小林計一郎（1979）：『わが町の歴史　長野』文一総合出版，p. 244，および長野市役所での聞き取りにより作成．

年の時点で16.8万人に達している．

長野市の市域の拡大とともに輸送・交通面での整備も進んだ．たとえば長野市中央通りの拡幅工事が，工費135万円をかけて1924年（大正13）11月に竣工し，幅員10間（約18 m）の道路が完成した．これは当時としては画期的な都市改造であった．これより先の1921年（大正15）6月には乗合バスが市内で初めて運行された．これを機に長野市と他の町村を結ぶバス路線が拡大してきた．また1926年（大正15）6月には長野電鉄の権堂駅～須坂駅間が開通するに至った．これら輸送・交通面の整備とともに，長野市中心商店街の商圏も拡大してきたのである．

昭和恐慌により長野県下の製糸業は大打撃を受けた．養蚕業を主としていた長野盆地の農村部の不況はもちろん，長野市の中心商店街でも商品の売れ行きが落ちるなど，不況に陥った．明治期以降に設立されてきた県下の中小銀行も経営危機に陥り，経営力強化のため，合併がなされてきた．このような中で不況対策の意味を含めて，市街地の整備が進められてきた．1931年には市道として初めて，中央通りが舗装された．また1934年には権堂通りが舗装された．一方，1932年に犀川にかかる丹波島鉄橋が完成し，この橋から県庁までの国道と，県庁から東に延びて中央通りと交差する昭和通りが1935年に完成した．1936年には長野駅舎が仏閣型に改築され，同時に長野駅前広場の拡張・整備がなされた．中央通りや権堂通りに通じるその他の道路の拡張・整備もなされた．その後，第2次世界大戦末期の1945年8月13日に長野市の長野飛行場・長野工機部・鐘紡工場などは初めて空襲を受けたが，中央通りや権堂通りは空襲を受けることがなかった．



第3図　長野市の人口推移

注：長野市全体の人口は1985年10月1日の市域の人口である．旧長野の人口は1923年7月1日の第1次編入合併の市域の人口である．

資料：1985年の人口は住民基本台帳に外国人登録を加えた人口である．1983年と1984年の人口は市の資料，その他は国勢調査結果による．

第2次世界大戦後には行政事務が増えたため，県庁所在地である長野市に官庁の出先機関が従来にも増して置かれるようになった．また経済の復興とともに各企業の本社・支社・営業所なども従来以上に長野市へ進出してきた．市街地も拡大し，それらへ通勤する周辺町村の人口も増加してきた．長野市と周辺町村の結びつきが強まるにつれ，長野市と周辺町村の合併が望まれるようになった．その結果，1954年4月1日に長野市は古里・柳原・浅川・大豆島・朝陽・若槻・長沼・安茂里・小田切・芋井の10村を編入合併し（第2次合併），面積が158.94 km²，人口が147,799人，世帯数が29,839の都市になった．さらに1966年10月16日に長野市は篠ノ井市・松代町・若穂町・川中島町・更北村・七二会村・信更村を編入合併し（第3次合併），面積が404.10 km²（1970年に境界が変更されて，面積が若干減少し，404.08 km²となる），人口が272,409人の都市になった．第3次合併後の市域でみると，長野市の資料によれば，市の人口は第2次世界大戦直後と1960年以降に増加が著しく，1974年に30万人を突破し，1985年に約33.7万人となった．しかし市の中心部（1923年当時の市域）の人口は1965年以降減少傾向

にあり，ここでは人口の空洞化現象が進みつつある．

長野市では人口増加に伴い，市街地は，市の北西部が山地であるため，主に東部・南部の平担部へ拡大してきた．これに伴って，中央通りの北西部やこの近辺にあった長野市庁舎や地元金融機関の本店などは，より広い敷地を求めたこともあって，中央通りの東部や南部へ移動した．さらに大型小売店が中央通りと昭和通りの交差点付近から長野駅前付近までの，中央通り南部に多く立地したこともあって，長野市での商業の中心も，中央通りの北部から南部へと移動してきた．また，工業をみると，従来の印刷・製本業や食品工業などの軽工業の他に，富士通長野工場や三菱電気長野工場が1966年以降に市東部の郊外へ進出してきたことから，重工業部門の比率も高まりつつある．

一方，中央通りの西方をみると，裾花川の扇央部付近に当たる所にあった長野刑務所が須坂市へ移転した跡地に，国の出先機関の合同庁舎として行政合同庁舎・法務合同庁舎・裁判所合同庁舎が1965～66年に建てられた．これらの庁舎の南部には県議会議員公舎や県庁があり，さらに政党の県本部，農協の各種県連合会本部，各新聞社の本社・支社，信濃教育会本部などもある．そして，これら一帯の地域は長野県行政の中心地域を形成している．

長野市の市街地の拡大に伴い，交通施設の整備も進められた．すなわち長野市と他の地域をより速く結ぶため，国鉄信越本線の長野駅～軽井沢駅間の電化が1963年に，同じく長野駅～直江津駅間の電化が1966年に完成した．さらに国道18号線バイパスが1966年に市の中心部を避けて開通した．また市民の日常の足としてのバス交通の便をはかるため，県下初のバスターミナルが中央通り南西方向の長野工業高等学校跡地で1967年に完成した．さらに，中央通りの東方を走る長野電鉄長野線の長野駅～善光寺下駅間2.3 kmの地下鉄化が完成し，この上に長野大通りが1983年に完成するに至った．

III　中央通りおよび権堂通りの景観

ここでは，長野市の中心商店街として発展してきた中央通りと権堂通りにおいて，商店の業種構成，商店の建物の階数を中心に，商店街の景観上の特色を考察しよう．

第1表は，善光寺から長野駅前までの中央通りの景観観察をもとに，通りの西側と東側において一部区間の長さで一致しない区間もあるが，中央通りを五つの区間に区切って，通りに面した1階の業種別商店数を示したものである．また第2表は権堂通りに面した1階の業種別商店街を示したものである．さらに第4図はそれらの通りの業種別商店分布を示したものである．なお第4図では昭和通りと中央通りの交差点付近と，長野駅前広場付近で，やや広い範囲で商店分布を示しており，両付近における一部の商店は第1・3・4表には示されていない．

以下は各区間ごとに商店街の景観を考察しよう．

1　「善光寺～仁王門」間と「仁王門～大門」間の景観

まず，「善光寺～仁王門」間（距離は約138 m）で商店の業種構成をみると，ここでは土産物店がとくに多く，土産物店の間に仏具店やホテル・旅館などが存在している．この区間における商店街の建物をみると，階数はすべて2階以下であり（第3表A），土蔵造りの建物が多く存在している（第4表A）．ここの土蔵造りの建物を見ると，石灰を用いた古典的な白壁による建物ではなく，ほとんどがコンクリートあるいはモルタルによって造られた近代的な建物である．写真1は「善光寺～仁王門」間における商店街の景観を示したものである．なおこの区間の南に続く「仁王門～大門」間（距離は約125 m）の通りでは西側に大本願が存在し，東側に8の寺院が並んでいる．そして「善光寺～仁王門」間と「仁王門～大門」間は，善光寺の門前町としての性格の最も強い所となっている．

第1表　長野市中央通りの1階における業種別商店数（1986年8月2日）

業　種（業種の計）		善光寺～仁王門		大門～協和銀行(西側)橋堂通り(東側)		朝日八十二(西側)権堂通り(東側)～昭和通り交差点		昭和通り交差点～長野駅前広場	
		西側	東側	西側	東側	西側	東側	西側	東側
百貨店・スーパーマーケット	(3)	—	—	—	—	—	—	2	1
衣服・洋品雑貨・小間物	(46)	—	—	4	8	—	11	7	16
くつ・カバン	(14)	—	—	—	1	—	3	4	6
食料品	(36)	1	—	5	4	7	6	6	7
家具・電気・金物・陶磁器	(25)	—	—	4	8	3	3	4	3
医薬品・化粧品	(17)	—	—	4	1	3	2	2	5
書籍・文具・印鑑	(15)	—	—	2	5	3	—	2	3
スポーツ・おもちゃ・楽器・レコード	(16)	—	—	—	2	2	3	4	5
写真・時計・眼鏡・貴金属・理科機器	(24)	1	—	3	4	3	3	5	5
土産物	(28)	8	13	1	2	—	—	1	3
仏　具	(5)	1	3	—	—	—	—	—	1
ホテル・旅館	(9)	3	—	1	2	—	—	2	1
食堂・喫茶店	(34)	2	1	7	6	1	5	6	6
金融機関	(16)	—	—	4	1	5	1	3	2
駐車場	(5)	—	—	2	1	—	1	1	—
その他	(39)	—	—	7	1	4	6	12	9
合　計	(332)	16	17	44	46	31	44	61	73

注：その他には味噌工場（1），郵便局（2），会社事務所（2），空き店舗（6），寺院（2）を含む．
　　仁王門から大門にかけての通りの西側には大本願が，東側には8寺院がある．
　　表中の朝日八十二は長野朝日八十二ビルのことである．
資料：観察により作成．

2「大門～協和銀行」間と「大門～権堂通り」間の景観

ここで「仁王門～大門」間の南側に続く通りで，中央通り西側の「大門～協和銀行」間（距離は約513 m）と，中央通りの東側の「大門～権堂通り」間（距離は約475 m）の商店街を見よう．なお中央通りの東側と西側で距離が異なるが，これは，中央通りを区分する際に区切りのよい通りが中央通りの西側と東側で一致せず，中央通り西側でやや長くなってしまったことによる．

中央通り西側の「大門～協和銀行」間と中央通り東側の「大門～権堂通り」間では，昔ながらの古い土蔵造りの建物で営業している商店が多く，土蔵造りの建物の商店の割合は6割を超えている（第4表A）．長野市のもう一つの中心商店街としての権堂通り商店街が中央通りの東側に接続していることもあ

第2表　長野市権堂通りの1階における業種別商店数

(1986年8月2日)

	北側	南側	合計
百貨店・スーパーマーケット	1	0	1
衣服・洋品雑貨・小間物	9	8	17
くつ・カバン	2	1	3
食料品	3	9	12
家具・電気・金物・陶磁器	3	0	3
医薬品・化粧品	1	7	8
書籍・文具・印鑑	1	1	2
スポーツ・おもちゃ・楽器・レコード	3	1	4
写真・時計・眼鏡・貴金属・理科学機器	1	1	2
食堂・喫茶店	5	5	10
その他	2	9	11
合　計	31	42	73

注：南側のその他(9)のうちには空き店舗(1)，派出所(1)，会社事務所(1)を含む．また，ここで示した権堂通りとは，中央通りと長野大通りにはさまれた通りをいう、

資料：観察により作成．

って，中央通りの東側の方が歩行者通行量が多い傾向にある．それで，東側の「大門～権堂通り」間の商店街は西側の「大門～協和銀行」間の商店街よりも早くから発展してきたのである．また，この東側の区間における建物の階数をみると，ほとんどが2階以下の建物で，最高でも3階にすぎない（第3表A）．そして業種別に商店をみると，各種の最寄り品・買い回り品の商店が軒を連ねて並んでいる．写真2は東側の「大門～権堂通り」間で見られる土蔵造りの商店の一つを示したものである．なお写真2では，商店が通りの東側にあるため，午後になって日光が店内を直射するのを避けるため，店先に連なる歩道上のアーケードの外側に，店名の入った垂れ幕を下げている．

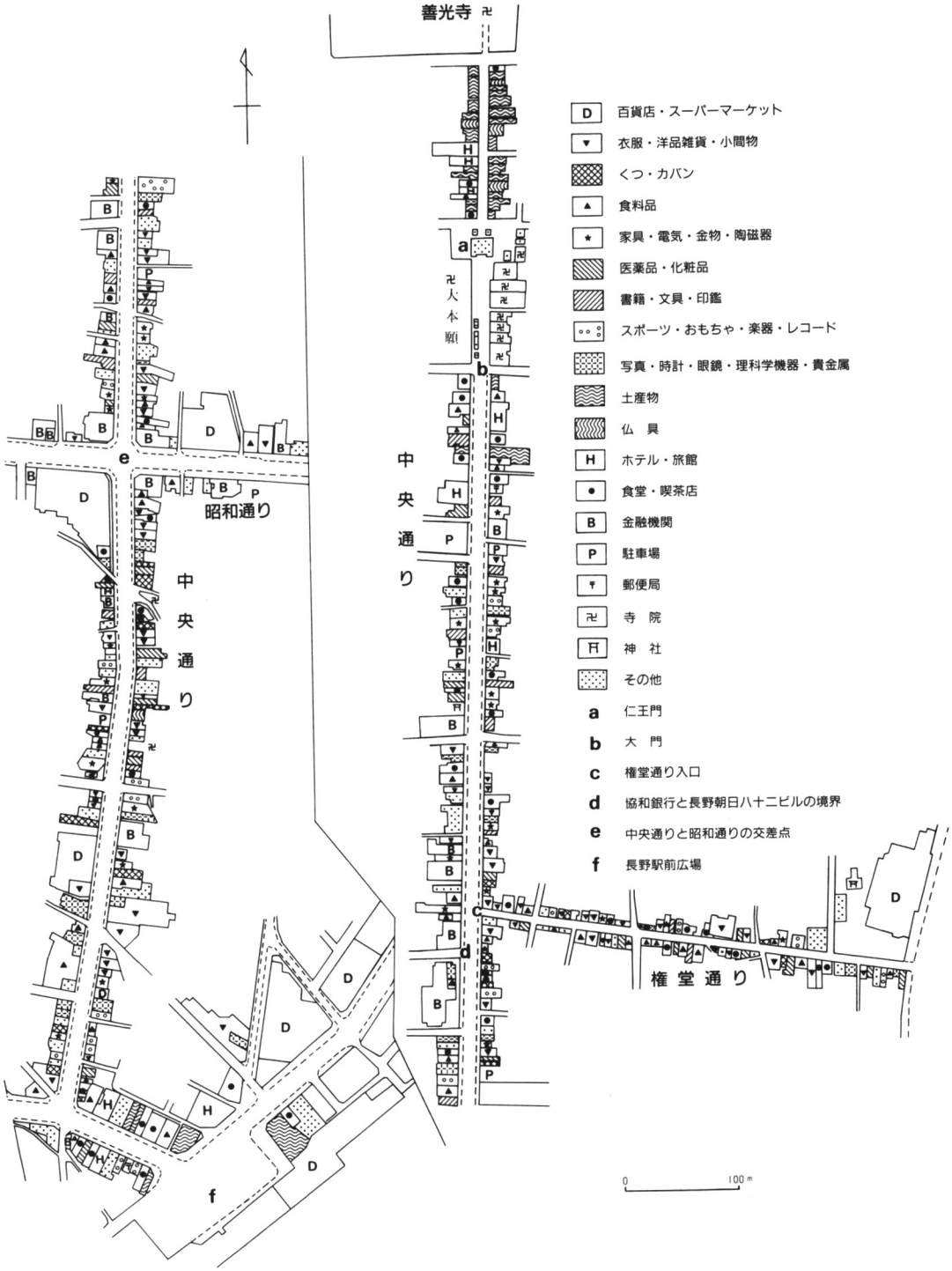
一方，中央通りの西側の「大門～協和銀行」間の商店街では，各種の商店が存在している．建物の構造をみると，2階以下の土蔵造りの建物の他に，近年に改築されたコンクリート造りの銀行・証券会社などの金融機関の建物が目立つ．そして4階5階の金融機関の建物がそれぞれ一つずつではあるが見られる．写真3は中央通り西側の「大門～協和銀行」間から南へ続く商店街を示している．この写真では市街地の西方を流れる裾花川で形成された扇状地の扇端部から盆地床にかけての，やや傾斜地に立地した商店街が写し出されており，金融機関の中高層の建物が目立っている．

3　権堂通りの景観

中央通りにほぼ直交する形で東方へのびる権堂通り（アップナード権堂）は，歩行者専用の，アーケードで覆われた商店街である．写真4は中央通りから権堂通りへの入口付近を示したものである．中央通りから長野大通りまでの権堂通り（距離は約380 m)をみると，この通りには近代的に改装した商店が通りの北側と南側に並んでいる．1階の商店の業種をみると(第2表)，衣服・洋品雑貨店が多いのが注目され，しゃれたブティック風の洋服店も見られる．商店の建物構造は鉄筋コンクリートやモルタルで造られたものが大部分である．建物の階数は2階以下のものが多いが，3階以上の建物も12ある（第3表B)．3階以上の建物の内訳をみると，階の上部を旅館としているものが一つ，住居用にしているものが七つ，大型小売店が一つなどとなっている．この大型小売店は権堂通りと長野大通りの交差点付近の北西部にあり，近年に中央の大資本により建設されたものである．

4「長野朝日八十二ビル～昭和通り交差点」間と「権堂通り～昭和通り交差点」間の景観

再び中央通りに戻り，西側の「長野朝日八十二ビル～昭和通り交差点」間（距離は約370 m）と，東側の「権堂通り～昭和通り交差点」間（距離は約408 m）の商店街を見よう．まず1階の商店の業種構成をみると(第1表)，東側の「権堂通り～昭和通り交差点」間では衣服・洋品雑貨・小間物の商店が多いのが注目される．



第 4 図　長野市中央通りと権堂通りの 1 階の商店業種（1986 年 8 月 2 日）
資料：観察により作成．なお右側に示した商店街が左側の商店街の上部につながる．

また商店の建物構造をみると(第4表A)，西側の「長野朝日八十二ビル～昭和通り交差点」間では，土蔵造りの建物とこれ以外の造りの建物の数がほぼ同じである．一方，東側の「権堂通り～昭和通り交差点」間では，土蔵造りの建物よりもコンクリートやモルタル造りの建物の方がはるかに多くなっている．建物の階数をみると、西側で8階の建物が出現するなど，中高層の建物が中央通りの北部に比べてやや増えてきている．

第3表　長野市中心商店街の建物階数（1986年8月2日）

A：長野市中央通りの場合

中央通りの区分	階数別建物数								
	2階以下	3階	4階	5階	6階	7階	8階	9階	10階
善光寺～仁王門（西側）	16	—	—	—	—	—	—	—	—
同　　（東側）	17	—	—	—	—	—	—	—	
〔仁王門～大門〕	〔西側に大本願，東側に8の寺院〕								
大門～協和銀行（西側）	37	3	1	1	—	—	—	—	—
大門～権堂通り（東側）	38	5	—	—	—	—	—	—	—
長野朝日八十二ビル～昭和通り交差点（西側）	21	2	—	1	—	—	1	—	—
権堂通り～昭和通り交差点（東側）	32	4	3	1	—	—	—	—	—
昭和通り交差点～長野駅前広場（西側）	32	3	9	2	—	—	2	1	—
同　　（東側）	32	11	6	7	3	1	2	—	1
合　計（総数：295）	225	28	19	12	3	1	5	1	1
割　合（%）	76.3	9.5	6.4	4.1	1.0	0.3	1.7	0.3	0.3

注：合計は，「仁王門～大門」間の寺院数と，「昭和通り～長野駅前広場」間の中央通りの東側に存在する2寺院を除いた数である．
表中の（東側）（西側）とは，中央通りの東側と西側を示す．
中央通り西側の協和録行と長野朝日八十二ビルは道路をはさんで南北に隣接している．

B：長野市権堂通りの場合

	階数別建数								
	2階以下	3階	4階	5階	6階	7階	8階	9階	10階
北　側	18	4	1	3	—	—	—	—	—
南　側	32	3	—	—	1	—	—	—	—
合　計（総数：62）	50	7	1	3	1	—	—	—	—
割　合（%）	80.6	11.3	1.6	4.8	1.6	—	—	—	—

資料：A・Bとも観察により作成．

5「中央通りと昭和通りの交差点～長野駅前広場」間の景観

中央通りと昭和通りの交差点付近では銀行の支店や百貨店・スーパーマーケットの大型小売店が立地している．昭和通りは中央通りと直交しているが，昭和通りの西方には長野県庁・長野中央郵便局・農協県連本部などがあり，一方，東方には長野市役所が存在する．それゆえこの交差点は，長野市の政治と経済の交差点ともいえよう．

さらに「中央通りと昭和通りの交差点～長野駅前広場」間（距離は約663 m）の商店街をみよう．この区間は中央通り南部に位置しており，長野市の中心

第 4 表　長野市中心商店街の構造別建物数（1986 年 8 月 2 日）

A：長野市中央通りの場合

中央通りの区分〔距離〕	土蔵造りの建物数（うち 1 階の店舗数）		その他の造りの建物数（うち 1 階の店舗数）	
	西側	東側	西側	東側
	両側の計		両側の計	
善光寺〜仁王門〔距離 138 m〕	14（14）	14（14）	2（ 2）	3（ 3）
計 33（33）	28（28）		5（ 5）	
〔仁王門〜大門（距離 125 m）〕	〔西側に本大本願，東側に 8 の寺院〕			
大門〜協和銀行（西側）〔距離 513 m〕	26（26）	――	16（16）	――
大門〜権堂通り（東側）〔距離 475 m〕	――	26（28）	――	17（17）
計 85（87）	52（54）		33（33）	
長野朝日八十二ビル〜昭和通り交差点（西側）〔距離 370 m〕	12（16）	――	13（15）	――
権堂通り〜昭和通り交差点（東側）〔距離 408 m〕	――	11（13）	――	29（30）
計 65（74）	23（29）		42（45）	
昭和通り交差点〜長野駅前広場〔距離 663 m〕	6（ 6）	6（ 6）	43（54）	57（65）
計 112（131）	12（12）		100（119）	
善光寺〜長野駅前広場〔距離 1,809 m〕	58（62）	57（61）	74（87）	106（115）
合計 295（325）	115（123）		180（202）	

注：合計は，「仁王門〜大門」間の寺院数と，「昭和通り〜長野駅前広場」間の中央通りの東側に存在する 2 寺院を除いた数である．
表中の（西側）（東側）とは，中央通りの西側と東側を示す．
中央通りの西側の協和銀行と長野朝日八十二ビルは道路をさはさんで南北に隣接している．

B：長野市権堂通り商店街の場合

中央通りから長野大通りまで〔距離 380 m〕	北　側	南　側	合　計
土蔵造りの建物数（1 階の店舗数）	1（ 1）	2（ 4）	3（ 5）
その他の造りの建物数（1 階の店舗数）	25（30）	34（38）	59（68）

資料：表の A・B とも観察により作成．

市街地における商店街としては開発が新しい方である．そしてこの区間は駅前の再開発などに伴って，近年に買い物客などの通行量が多くなってきた区間である．商店の業種をみると（第 1 表），中央の大資本によるスーパーマーケットなどの大型小売店が進出しているのが目立っている．商店の建物構造をみると（第 4 表A），中央通りの中・北部で多く見られた土蔵造りの建物は，この区間の両側では極めて少

写真 1 「善光寺〜仁王門」間の商店街（1985 年 8 月撮影）
（善光寺の門前町としての性格が強く，土産物店や仏具店が多い．）

写真 2 中央通り東側の「大門〜権堂通り」間の土蔵造りの商店の例（1985 年 8 月撮影）
（中央通り東側では午後になると直射日光をさけるため，写真のように垂れ幕をおろしている．）

写真 3 中央通り西側の商店街（1985 年 8 月撮影）
（中央通り北部から通りの西側の商店街を望む．金融機関の建物が目立つ．）

なく，コンクリートやモルタルなどによって造られた建物が多くなっている．建物の階数をみると（第 3 表A），この区間では 3 階以上の中高層の建物が中央通りの中・北部に比べて多くなっており，とくに通りの東側で中高層の建物が多くなっている．写真 5 は，中央通り南部における西側の商店街を示したものである．この写真で見られるように，中高層の建物が多いものの，旧来からの土蔵造りの建物で営業する商店がわずかながら残っている．

長野駅西口の駅前では再開発がなされ，ホテルなどの 6〜10 階の高層の建物が立地し，これらの 1 階では買い回り品や最寄り品の店の他に，土産物店も見られる．写真 6 は，長野駅西口前に立地しているホテル群を示したものである．この写真では 1 階部分が写しだされていないが，この 1 階部分に土産物店などが存在している．

また写真 7 は，長野駅西口前の北東部に進出した百貨店（この百貨店は 1986 年秋にさらに店舗を拡張している）を示している．近年に中央の大資本による百貨店がそこに進出してきて以来，その付近には近代的な建物による小売店が多く開業されるようになってきた．なお写真 7 に示されている百貨店などは中央通りからはずれるため，第 1〜4 表には含まれていない．また写真 7 で乗用車が走っている道路の所は，長野電鉄線の一部地下鉄化によって長野大通りと呼ばれる道路となった所の起点付近である．この道路の起点の地下に長野電鉄長野駅が存在する．

さらに写真 8 は，長野市の正面玄関というべき長野駅西口と駅ビル MIDORI および駅前広場を示したものである．長野駅舎の屋根は善光寺の屋根を模した形をしており，大変にユニークである．また駅ビル MIDORI には各種専門小売店が入っており，それぞれ商業活動をしている．そして写真 7 に示した百貨店と写真 8 に示した駅ビル MIDORI は，最近の長野市における買い物行動の中心地の一つとなっている．また長野駅西口にはバスの発着場および

写真 4　権堂商店街（アップナード権堂）の入口（1985 年 8 月撮影）
（この通りはアーケードに覆われており，近年にこの通りの東部に大型店が進出し，にぎわいをみせている．）

写真 5　中央通り西側の「中央通りと昭和通りの交差点～長野駅前」間の商店街の一部（1985 年 8 月撮影）
（中央通り南部では近代的建物に立てかえた商店が多いが土蔵造りの建物も部分的に残っている．）

写真 6　長野駅西口のホテル群（1985 年 8 月撮影）
（長野駅前の再開発に伴い，駅前にあった旅館は近代的な高層建築のホテルへと変わった．なお写真では 1 階部分が欠けている．

写真 7　長野駅西口の北東部にある大型百貨店と長野大通りの起点（1985 年 8 月撮影）
（写真中央に写っている大型百貨店は 1986 年にさらに店舗を拡大している．また自動車が走っている道路の地下には長野電鉄長野駅がある．）

写真 8　長野駅西口（1985 年 8 月撮影）
（長野駅舎は善光寺を模した屋根形をしている．駅舎の隣には駅ビル MIDORI があり，この中で各種専門店が営業している．）

写真 9　長野駅東口（1985 年 8 月撮影）
（長野駅東口では将来の北陸新幹線の長野駅乗り入れに備えてか，西口ほどの整備がなされていない．）

タクシー乗り場があり，これらは駅の 500 m ほど西方にあるバスターミナルとともに，市民の日常交通の重要な拠点となっている．

最後に，写真 9 は長野駅東口付近の景観を示したものである．この東口付近には，西口付近でみられるような中高層の建物は少ない．そして東口広場は駐車場に利用されたり，また自転車置場に利用されたりしている．とくに自転車置場は西口にはとうてい見られないものである．さらに東口周辺では月極駐車場やテニスコートなどの，いわば社会的空閑地ともいえる土地が広く残っている．これらは，将来の北陸新幹線の長野駅への乗り入れに備えて，駅舎などの用地に転換できるように広く残されているのであろうか．いずれにせよ東口の整備は今後の課題となっている．

IV むすび

本稿では，長野市の中心市街地の発展，および中心商店街である中央通りと権堂通りの景観について考察してきた．これらをまとめると以下のようになろう．

(1) 明治期以降に長野市は，善光寺の門前町としてだけでなく，長野市の政治・経済・教育・文化の中心地として発展してきた．中心商店街は善光寺と長野市を結ぶ中央通りを中心に形成されてきた．第 2 次世界大戦後，長野市の市街地は市の東部・南部へ拡大してきた．長野市の商業の中心も中央通り北部から，中央通り南部へ移動してきた．

(2) 中央通りの商店街をみると，「善光寺～仁王門」間では土蔵造りの土産物店が多く存在する．この区間とこの南側に続く「仁王門～大門」間は善光寺の門前町としての性格を最も強く残している．

(3) 中央通り西側の「大門～協和銀行」間と中央通り東側の「大門～権堂通り」間では土蔵造りの建物で営業する商店が多い．なお「大門～協和銀行」間では土蔵造りによる商店の他に，コンクリート造りの建物で営業する金融機関が目立つ．

(4) 権堂通りでは近代的に改装した商店が多く，また衣服・洋品雑貨の商店が多い．

(5) 中央通り西側の「長野朝日八十二ビル～昭和通り交差点」間では，土蔵造りの建物とこれ以外の建物の数がほぼ同じである．一方，中央通りの東側の「権堂通り～昭和通り交差点」間では，土蔵造りの建物よりもコンクリートやモルタルで造られた建物の方が多くなっている．

(6)「昭和通り交差点～長野駅前広場」間ではスーパーマーケットや百貨店などの大型小売店が多くみられる．商店の建物もコンクリートやモルタルで造られたものがほとんどである．建物の階数も 3 階以上の中高層のものが，中央通り中・北部に比べて多くなっている．

本研究を進めるに当たり，長野市企画調整部企画課を始めとする関係諸機関の各位に援助をいただいた．ここに記して厚くお礼申し上げる．なお研究費の一部として，昭和 60・61 年度文部省科学研究費補助金（一般研究Ｂ）『人口規模別にみた都市圏内の都市・村落景観とそのイメージに関する研究』（研究代表者：立正大学文学部教授　正井泰夫）を使用した．

（1987 年 2 月 20 日受付）
（1987 年 4 月 17 日受理）

参考文献および資料

1) 市川健夫（1972）：「7　おもな都市」青野壽郎・尾留川正平編：『日本地誌　第 11 巻　長野県・山梨県・静岡県』二宮書店，pp. 105～113.
2) 小林寛義（1985）：『長野県の地誌』信濃教育会出版部，p. 330.
3) 小林計一郎（1976）：『わが町の歴史　長野』文一総合出版，p. 260.
4) 小林計一郎・鬼頭康之・依田康資・小林英一・塩入　隆・青木孝寿（1977）：『写真にみる長野のあゆみ』長野市，p. 154.
5) 長野市企画調整部企画課（1986）：『長野市統計書昭和 60 年版』長野市，p. 383.
6) 長野市企画調整部企画課（1986）：『長野市の商業（昭和 60 年商業統計調査結果）』長野市，p. 106.

Townscape of the Main Shopping Streets in Nagano City

Yukihisa UCHIYAMA*

In this paper the writer describes the developement of Nagano City with special emphasis on the townscape of its main shopping streets. The results are summarized as follows:

Nagano City has developed its urban function not only as Zenkoji temple town, but also as the center of goverment, economy, education and culture in Nagano Prefecture since the Meiji era. The built-up areas of Nagano City have expanded from around Zenkoji Temple toward eastern and southern direction. As the city grew, two main shopping streets were formed in the central district, Chuo-dori Shopping Street and Gondo-dori Shopping Street respectively.

Chuo-dori Street extends southward from Zenkoji Temple, linking the temple with Nagano Station. The length of the street is about 1,800 meters. More than 330 stores are operated with all kinds and sizes. On the other hand, Gondo-dori Street extends eastward from the north-central part of Chuo-dori Street. It has a length of about 380 meters. Along this street more than 70 stores are to be seen.

Formerly the center of commerce in Nagano City was found in the northern section of Chuo-dori Shopping Street. But now the southern section has taken over its central position. Around Zemkoji Temple located in the northen end of Chuo-dori Street a number of souvenir shops are concentrated. Most of the buildings of these are made of reinforced concrete, but the house style is very traditional.

The northern and central sections of Chuo-dori are swarmed with small stores, and many of them are made of earth and old-fashioned. However, the western side along the central section of Chio-dori is characterized by several financial establishments. These buildings are made of steel skelton concrete with three stories or more.

A few department stores and supermarkets are located in the southern section of Chuo-dori. Most of the buildings in this section are new and tall with those in the northern and central sections of Chou-dori. Especially the hotels located just in front of Nagano Station are new and tall.

Gondo-dori Shopping Street is arcaded with many small stores side by side. This street has many clothing stores, groceries and restaurants. The inside of each store has been modernized in many cases.

---

* Rissho Uriversity